

アマタヴ・ゴージュ著「ガラスの宮殿」新潮社 2007年10月30日刊を読む

1. 王族を訪れることを許された数少ない人々は、集落の光景に、ゴミと人糞の臭いに、厚く立ちこめる薪のとばりに衝撃を覚えた。馬車から下りた彼らは、ビルマ最後の国王の住みかが貧民街の中心になってしまったことが信じられず、しばしば驚愕の表情を浮かべていた。

王妃は薄い唇に誇り高い微笑を浮かべて、そのような訪問者たちを迎えた。そうなのだ。あたりを見るがいい。我々がどのような生活をしているか見るがいい。そうなのだ。アジアでもっとも豊かな地を支配していた我々は、いまやここまで落ちぶれた。これこそ彼らの仕業であり、ビルマ全土にこうした仕打ちをするつもりなのだ。道路や鉄道や港を作ってやると約束し、彼らは我々の王国を取り上げた。しかし、私の言葉を肝に銘じておくがいい。しまいにはこのようになってしまうのだ。数十年もすれば、宝石も材木も石油も、ビルマの富はすっかり消え失せる。そうなれば彼らも去るであろう。かつては飢える者もいなければ、貧しさゆえに読み書きができない者もいなかった。我々が黄金のビルマに残るものとはといえば、貧困と無知、飢えと絶望だけであろう。彼らのいう進歩の名の下に囚われの身となったのは我々がはじめてだが、何百万という人々があとに続くことになるであろう。これが我々全員を待ち受けていることなのだ。このようにして、我々は終末を迎えるのだ——疫病から生まれた貧民街の囚人としてな。いまから百年もすれば、シャム王国と奴隷の身に落ちた我が国の状態とのちがいに、人々はヨーロッパの強欲さに対する告発を読み取ることになるであろう。 P106

2. 来たるべき世界においては、読み書き能力が生存の鍵を握ることになるだろう。教育が緊急の課題となっており、どの近代国家も義務化しようとしていた。東に旅立った仲間たちを通じて、日本が急速にこの方向に進んでいることを知った。シャムでも王家が総力を挙げて教育の改革運動に取り組んでいた。

P262

#### [コメント]

ミャンマーとインドの「理解」のために本書は欠かすことができない。<sup>ちみつ</sup>緻密な取材に基づいた一つ一つの文章は、胸に迫るものがある。

- 2009年1月15日林明夫記 -